



高崎高校同窓会報

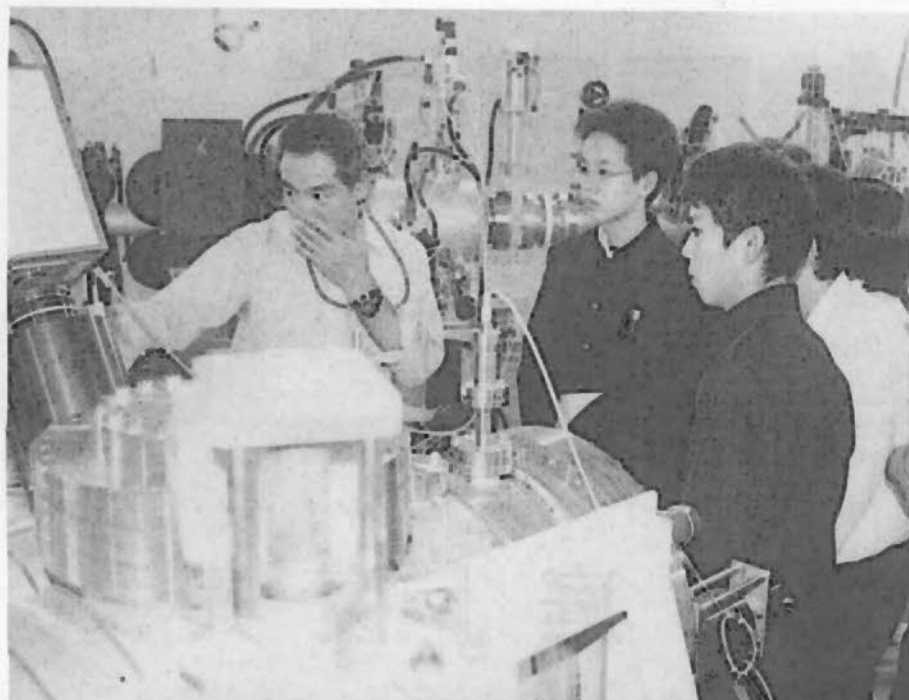
2002

第36号

平成14年11月30日

特集／『指月庭』復興





スーパーサイエンス授業風景1
(平成14年9月30日：日本原子力研究所)



スーパーサイエンス授業風景2
(平成14年10月16日：本校物理講義室)

GRAPH FILE

高高同窓会 No.36 目次

あいさつ

ごあいさつ 同窓会会長 横田 英一 3

ごあいさつ 学校長 小林 克茂 4

教育の現場から 同窓会副会長 大木 紀元 4

母校に赴任して 全日制教頭 大崎 博章 5

銀杏並木の下に 通信制教頭 武井 敏男 5

特別寄稿

高中の思い出 43期 斉藤 達蔵 6

ヨーロッパ教育事情 53期 木暮 繁俊 7

二十八年目の雑記帳 73期 飯塚 俊彦 8

甲子園の思い出 83期 重田 政樹 9

特集

●「指月庵」復興

論壇

政治の場で思う教育 63期 萩原 康二 12

同窓会だより

高朋会(県庁・高高同窓会)について 75期 松村 重 13

区切りの集い 51期 持田 章 13

同窓会本部から

卒業生の作品紹介⑬ 64期 峰岸 達 14

●聖書文庫 15

●喪章・叙勲者紹介 15

母校だより

各部の活躍・活動 16・17・18

第五十六回定期戦 19

最近の進学状況 19

人事異動 19

同窓会会計報告、新年総会案内、ゴルフコンペ報告、編集後記 20



ごあいさつ

同窓会会長 横田 英一

今年も残すところ二か月足らずとなり、周囲の山並みにも変化の相が見られる頃となりました。浅間山に降った雪が、晩秋の日差しに照らされ、鹿の子まだらに見える暖かな一日もあります。日に日に近づく冬を身近に感じるようになってまいりました。

同窓の諸兄におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。各界・各方面における諸兄のご活躍を見聞することが多いのですが、同窓会といたしましては、誠に心強く、ご同慶の至りであります。どうか健康に留意され、ますますご活躍なされますようご祈念申し上げます。皆様のご活躍に応えるべく、本同窓会もさらに充実した活動を展開してゆく所存であります。

毎年、会報の紙上において私がお願い申し上げている維持会費の納入につきましても、今年度は特に大勢の会員の方がお納め下さいました。当初の予算額を上回るほどになっており、皆様の本同窓会に寄せる思いの深さを改めて感じている次第であります。

今年度、同窓会の行った大きな行事のひとつに「指月庭」のリニューアルがあります。

多くの同窓生の強い要望があり、本年二月に、かつての名苑が「薔薇の香匂う」庭として復興いたしました。正門を入ってすぐ右手に、樺の大木が聳え、その前に美しく整備された庭が広がっています。薔薇の花の咲き誇る季節には、翠巒会館のステンドグラスに描かれた中空に浮かぶ薔薇と指月庭のそれとが、えいわれぬ調和を見せております。会員の皆様のご多くにご覧になっていただきたいと思っております。

今年を振り返ると、三月、同窓会副会長の職を長きに亘り努めておられた田中順氏の突然のご逝去は、私たちにとって大きな痛手でありました。平成三年に副会長に就任されて以来、高崎高校同窓会を支えてきた一本の太い屋台骨が失われたようで、誠に残念でなりません。本校同窓会のさらなる発展を願ってやまなかつた田中順氏の御遺志を受け継ぐことを誓いながら、冥福をお祈り申し上げます。

さて、進取と活発の気運にとんだ高崎高校は、目覚ましい活動を展開しております。毎年五月に行われるスポーツの祭典「高校総体」において、今年は総合第二位という輝かしい

成績を収めました。教育目標に掲げられている「文武両道の堅持」を、後輩たちは見事に遂行しているようであります。「二学期制の導入」や「企業・研究所旅行の実施」など、様々な新しい取り組みがあるなかで、文部科学省の決定によって「スーパーサイエンスハイスクール」に認定されましたことは、大きな未来を私たちに予感させてくれます。単に高崎高校だけにとどまるものではなく、国家の飛躍や、果ては人類の幸福や文化の発展に繋がるのではないかと夢は膨らむばかりです。今、生徒たちは、トップクラスの研究者や技術者との交流、先端技術との出会いを通じて、将来有為な科学技術系の研究者となるべく勉学に励んでおります。

同窓会といたしましても、高崎高校の発展を第一に考えるのは勿論のことですが、社会全体を潤すことのできる活動や人材の育成を支えていく所存であります。今後とも同窓諸兄のご支援をよろしくお願い申し上げます。

(群馬トヨタ自動車(株) 代表取締役社長 50期)



いあいさつ

学校長 小林 克茂

同窓会報第三十六号の発刊を心からお慶び申し上げます。高高に赴任しあつという間に一年が過ぎ、二年目も半ばを迎えております。

同窓会の皆様には、常日頃から学校運営に対し多大なご支援・ご協力をいただいておりますことに、深く感謝申し上げます。お陰様を持ちまして、本校の教育活動は順調に推移し、生徒は勉強に部活動に毎日元気に精を出しています。

本校の進路状況を初めとする学習活動の様子は、会報後半にある「母校だより」に詳しく掲載されておりますので割愛させていただきますが、高高の良き伝統である文武両道の教育方針を守り、頑張る所存でありますので、今後とも宜しくお願いいたします。

今年は懸案でありました指月庭の再興も成り、今バラの花が咲きそろっています。ようやく、校歌に歌われている「バラの香匂う学舎」となり、生徒達は楽しい青春時代を謳歌しています。卒業後、数十年経ち、高高を回想するときにはきつと指月庭を思い出すことでしょう。

学校は今年度から週五日制が始まり、来年度からは新教育課程が施行されます。こうした中、新聞等では学力低下の問題を初め、教育改革の話題が毎日のように取り上げられております。こうしたこと

を受け、本校も今年度から二学期制の実施と土曜日に補習授業を実施することにより、保護者や生徒の不安解消に努めています。また、従前実施されていた修学旅行を廃止し、企業研究所訪問に衣替えし、生徒が目的意識を持った高校生活を送れるように心がけています。

更に、今年度は文部科学省の新規事業であるスーパーサイエンスハイスクールに指定されました。著名人を学校に呼ぶいわゆる出前授業と休みの日に校外に出かけて行き研修するサイエンスワークの二本の柱からなっております。

日本はもとより世界の第一線で活躍している先生方から直接授業を受けることができる生徒は幸いです。また、こうした機会を通して、多くの研究者の生活の一端に触れることができるのもありがたいことです。高校時代はさしたることはできませんが、大学やその先の就職を考える上ではこの経験が大いに役立つと確信しています。真に研究をしようと思えば、研究施設が整った大学に入ることが大切です。難関大学にチャレンジする必要性も自ずから理解できます。数年後には世界で活躍する科学者が輩出してくれることを期待しています。

終わりに、今後の同窓諸兄のご活躍を祈念し、あいさついたします。



教育の現場から

同窓会副会長 大木 紀元

一昔前、過疎の村で分校が廃校になるたびにニュースになったが、今では都市の中心部の小学校が過疎の悲哀。子供の姿が見当たりません。私学の経営者が先を案じています。

明治三十七年「煙草専売法」ができるまでは、タバコは私企業でも製造できたので、これで大儲けをした岩屋天狗こと岩谷松平氏などは、愛人二十五人を店の二階に住まわせて、産ませた子供が五十人。更に江戸時代に遡れば、徳川十一代將軍家齊公などは、四十人の側室に男子二十八人、女子二十七人、計五十五人の子たくさん。一見か二見の限定生産パパには、もうひと頑張り願いたい。

学校サイドも工夫を凝らし、生徒に先生の評価をさせ、生徒に人気のない先生は御払い箱、企業で実績を上げた研究者や業界で名の知れた人を集めています。

そのような時代の流れで、学校に残らなかった我が儘組にも白羽の矢がたち、教育の現場に向向いていますが、学生には大旨好評なようです（サインをもらいに来る生徒が多いのは少々困惑）。

母校でもスーパーサイエンスハイスクールの指定を受けて、現役の当方の友人なども来校しているようですが、きつと良い成果が得られると思います。義務的に教わって身につくものは極わずか、応

用もめつたにしません。盗んだものは百パーセント血肉になります。教えるのではなく盗ませることです。

そのために、一番最初の授業は講義ではありません。作文です。テーマは「私」、自分とは何なのか、何をなすべきなのか自由に書かせます。提出課題は教授の自分が全文直接校閲し、寸評を書き添えて厳封の上、提出者に直接戻します。表現能力には点差をつけますが、内容には点差をつけません。皆なかなかのものです。次の授業は「人の一生が大河ドラマなら、脚本・演出・主演とも自分自身でありたいものです」。皆、大賛成です。

ならば、私と過ごす一年間、君は何をどうなすべきか。自分で考え自分で実行しなさい。できれば人生の計画書を作成しましょう（作成方法を指導。授業にくらのコストがかかっているか、その金はだれが出しているかも考えさせます）。

授業はそれからです。盗むモノを見つけ人々たちには、居眠りなどはありません。

（高崎芸術短期大学 学芸員教授 58期）





母校に赴任して

全日制教頭 大崎 博章

福田前教頭（五十九期）の後任として、四月よりお世話になっております。卒業以来三十数年が経過し、その間、研修会等で何度か訪問する機会があったものの「部外者」として本校を眺めておりましたが、今度は「教職員」として様々なことに関与する立場になりましたことに多少の戸惑いがあったのは事実です。四月に赴任してまず感じたことは、生徒の活動がまさに活発である、ということでした。春休み中もグラウンドや体育館では元気いっぱいの声が響き渡り、練習試合等も繰り広げられていました。授業が開始され教室内外では先生方のそれぞれ個性あふれる授業に、生徒たちが反応を示し活気が満ちあふれております。私の在学当時の施設・設備で面影をとどめているのは、校門や銀杏並木くらのものでしょうか。木造校舎は勿論、講堂、体育館、当時新しかった理科棟も皆きれいに整備されています。また、伝統ある行事の「翠雲祭」や「前高との定期戦」も継続されておりうれしい限りです。当時も文武両道が叫ばれ部活動も盛んであったと思いますが、現在は部活動への加入率は九十八%もあり、特に運動部へは全体で六十四%、一年生では七十一%もの生徒が参加して毎日頑張っています。本年度の県高校総体では十九年ぶりの総合優勝を飾り、来年こそは総合優勝をと、各部門とも熱が入っています。また、「当時は生徒」「現在は教師」という立場の違いからかわ

りませんが、在学当時の先生方と、現在の本校での先生方とで学習、部活動等の指導において、「熱心さ」が違う、と感じます。まず早朝補習から始まり、六十五分授業がびつしり。放課後は三年生には補習、一・二年生には熱の入った部活動指導。さらに担任の先生は年間五回以上の生徒また保護者との面談等々。その熱心さには頭が下がる思いです。それに九百数十名の生徒たちが夢中になって取り組んでいます。その甲斐あって運動部は先ほど紹介したようなすばらしい成績を取め、また、学芸部も囲碁・将棋部の全国大会出場をはじめ、新聞部・文芸部・吹奏楽部等の頑張りもすばらしいものがあります。文武の文の方でも高い希望を堅持し、最後まで粘り強く努力しており、この会報の中で紹介されているとおり、すばらしい実績を上げています。さらに大学に入学すればそれでよし、ではなく、将来の夢、職業観等を養う指導も絡めていきます。たとえば、一年生では「社会人講師による授業」「ボランティア活動」、また二年生では「企業・研究所・大学訪問旅行」なども実施し、社会のリーダーを養成すべく取り組んでいます。

その本校に赴任し約半年が過ぎようとしている現在、これからさらに発展するための課題もいくつか感じられます。一つは、職員・生徒に「これでよし」という意識が多少感じられ、いわゆる危機意識が少ないように思えます。特に学習面ではさらに伸びる力を持つているにもかかわらず、甘えてしまっているような感じの生徒も見受けられ、もどかしさもおぼえます。さらに生徒を叱咤激励しこれまでに以上のすばらしい



銀杏並木の下に

通信制教頭 武井 敏男

四月当初、銀杏並木の下を現役の高高生が歩み去るのを見ながら、隔世の感を禁じ得ませんでした。背は高く足も長く靴を履き、彼らはスマートに歩いていきます。下駄を履き学帽をかぶり肩掛け鞆をさげて歩いていた同級生の幻影が、三十数年の時を経て現役の生徒と重なり合いながらも、溶け合うことなく消えていきました。

日常生活の中での三十五年ぶりの高崎高校との出会いは、かつての高高時代が私にとって実に素直にノスタルジアに浸れるものであるだけに、当初は戸惑ったものでした。しかし、三十五年という歳月の中で予想もしなかった世の中の変化があったのですから、高崎も例外であるはずがありません。銀杏並木の下と同級生の幻影にノスタルジアを感じる方が時代錯誤なのではないでしょうか。

にもかかわらず、跳ぶ前に見てしまうのではなく、見てしまいう前に跳ぼうという若者らしい精神は、昔も今も変わることなく脈々と流れているように思います。勉学のみならず部活にも打ち込む姿勢に

学校にすべく微力ではありますが奮闘するつもりでいます。同窓の皆様のご指導・ご助言をいただきますようお願い申し上げます。こあいさつといたします。

（63期）

は、脆弱さどころか研ぎ澄まされた迫力が感じられます。

この四月から私は通信制に勤務していますが、その通信制も昔とはだいぶ雰囲気は異なっています。現在の高高通信制をキャッチフレーズ風に申せば、「もう一つの高校」と言えましょうか。かつてのように、ほとんど三十歳過ぎの方が静謐さの中でスクーリングに通うというのではなくなりました。もちろん三十代以上の方もたくさんいますが、十代・二十代の生徒が銀杏並木の下に集まっている様子は、通信制が全日制・定時制と並ぶ第三の高校として、若い世代に受けとめられるようになったことを示す証左ではないでしょうか。

かつて銀杏並木の下に集った若人の姿を想起し、現在そこに集っている若人の姿を見、そして今後そこに集うであろう若人の姿を想像するにつけ、銀杏並木の下に、そして薔薇の花咲く「指月庭」や巨大な樺の木の下に、幾世代に亘って若人の熱き思いと友情とが庇護されることを願ってやみません。

（66期）

私達は乗附に移転した高校の第一期生であるが、別に何の特徴のあるクラスでもない。校風刷新とか、格別に意気軒昂たる気概も覚えがない。その点先輩にも後輩にも申し訳ない平凡なクラスであったと思う。

当時、市内の生徒は、自転車通学が許されなかったので、柔弱な体、たちまち、丈夫になれた有難さは、ハッキリと感謝している。

乗附の原野にポツンと建っている新築の木造校舎は、輝いていたが、何もかもが、未整備の学校だった。

当時、作業という教科目があった。この授業で近くの碓氷川原に行つて、一人が二箇宛の川原の栗石を校庭整備の為に持ち運んで来る等の労務を、三四回、経験させられた。しかし目に見えて立派な校庭になった記憶がない。もうひとつは校庭の草むしりだった。何事も人力に頼った戦争中の社会は現在、想像すべくもない。更に、コヨリとか薬縄の作り方など教えられたが今でもやっているのだろうか。時間がゆつくりと動いていた。もう一つ強く印象に残っているのは、学校の側溝にアユを発見したことだ。下校の時間を待ち兼ねて、数人で追い掛けたが、捕り損ねた。並坂方面からの通学生は、八千代橋を渡つて、暫く河原の石コロ道を歩いて、当時でも珍しい吊橋の八千代橋を渡つて乗附の練兵場に入った。



特別寄稿

青藤 達蔵

高中の思い出

吊橋は水面上約三メートルの高さがあった。練兵場の端の通学路では、歩兵第十五聯隊の新兵さんが古参兵に、はじめに小突き回されているのを横目で見ながら、校門迄の約一キロメートルの道のりを歩くのは、自分が制裁を受けている様な気がして、厭な区間であった。当時は先生に行き会ふと停止敬礼をすることになっていた。先生は殆ど全員が自転車に乗つておられたので、登校時の私達を超越して行かれる先生に、五、六メートルも後から立ち止まって拳手の敬礼をする生徒達の心境を現在の学生達は想像できるだろうか。私の記憶では、ごまかした生徒は無い。清らかな生徒達の集団であったと言えるのではない。

当時は日本中が何処に行つても、一様にピンと張りつめた空気が充満

していたが、特高警察とか、憲兵とかの威力は水戸黄門以上の権限があった。その中に滲り切っている国民は、大体において当たり前の事に思つて不都合を感じていなかった事は、戦後の平和を経験した今となって、妙な時代だったのだなあと、しみじみ思ひかえされる事である。勉学の記憶がうっすらとしている事は誠に恥ずかしい限りであるが、高中時代で、たった一つ、今だに解けない疑問がある。それは現在でも、卒業生、在校生にも愛唱されている「翠鸞影を浮かべて」を口ずさむことすら当時は禁止された事である。焚書にあったこの歌詞もメロディーも今だに郷愁に惹かれて事あることに合唱している私達を禁止した先生達よ、どう説明してくれるのか。不思議な時代でもあった。思い出は六十年以上

もさかのぼる。色々と問題はあつても、希望に燃えた若い日々は貴重な宝である。乗附原頭に格納庫まであったグライダー部の活躍、黄色いプライマリー型の機体が青空に舞い、射撃部の実弾射撃訓練や、国防科学部の各種兵器模型の制作等、今はどうなっているか。野原の一軒家の高中の創生記であるが、入校の時、百六十二名だった同期生の一人一人が今でも鮮明に思い出せる暖かいクラスでもある事、かくれた誇りでもある。

当時、色々な意味で県下のライバル校の前橋中学は紳士の校風を持ち、我が高崎中学は野武士の伝統を持つと変な誇りを自慢していた気風があったことは、今の後輩達は知っているだろうか。

(三和設計 代表取締役 43期)

特 別 寄 稿

ヨーロッパ教育事情



木暮 繁俊

平成十四年四月に、私の所属する「こども未来特別委員会」はヨーロッパ各国の教育現場の視察へ行きました。

まず、気が付いたことはヨーロッパの各国は教会を中心に街が造られていて、まるで日本の門前町のようなであったことです。その為か教育現場は宗教に多くの時間をさいていました。

最初の訪問国イタリアのフィレンツェでは我が国の福祉政策のように所得に応じて国民が負担をしているとのことでした。また、他のEC諸国と同様にこの国でも移民が多く、その為に教育現場でも色々な問題が生じているとのことでした。思うに、日本も移民政策は今、真剣に考える時がきていると思います。それから、日本でも問題になっている少子化に対しては意外と楽観的であったことが印象的でした。

印象的といえば、人間の生き方を考えさせられたのがバルセロナのサ

ダコ学園でした。この校名は広島で被爆した佐々木貞子さんの生き方に感動した人達が「サダコ学園」と命名したのだそうです。人間として与えられた運命に従い、一生懸命生きる事は遠くバルセロナの人々にも感動を与えたことを実感しました。

さて、日本も平成十四年度より学校の完全週五日制が実施されるようになりましたが、早くからこの制度を取り入れていたのがフランスでした。ここで、私がユニークだと思ったのは週末の活動を子供達の自由な考え方に基づいて行っていることでした。スポーツや芸術などの文化活動の他にもボランティア活動が盛んでした。もちろん、こうした活動は子供達だけでは成り立ちませんから、大人達が、それこそボランティアでさまざまな活動を支えています。

最後の訪問国ドイツでは、おもわず、懐かしい気分になりました。それは、私が育った昭和二十年代の生活を再現したような情景が幼稚園の

教育現場で行われていたことでした。子供達は楽しんでいるようでしたが、我々が子供の頃は、遊び道具にしても自分達で作って工夫しなければならぬ状況下でした。それは、戦後の物がなく、貧しい時代の為に、仕方なく行っていた事です。ですから、先進国のドイツで経済や生活水準を落とさずに昔の生活を実行することは、かえって難しいのではないかと思います。

ところで、慌ただしい視察旅行でしたが、マロニエの花がどこへ行ってもきれいに咲いていて、それがずいぶんと心を和ませてくれました。

「マロニエの咲く道続くヨーロッパ」
「マロニエの溢るるばかりヨーロッパ」

「マロニエの花散るパリや晴れ渡り」
「マロニエや王朝絶えて久しかり」

(群馬県議会議員 53期)

七十三期の卒業は一九七四年、昭和四十九年の三月だった。それから二十八年が経ち、再来年の同窓会の当番幹事を担当する歳になってしまった。今もそうだと思うが、高高からは進学が当然のこととなっていて、七十三期の卒業生もそれぞれの進路に進学し現在は社会の各層各分野で中堅どころを担っている。先日も当番幹事の打ち合わせで二十人ほどが集まったが、医師あり教師あり経営者あり公務員ありと多様な職業の集まりとなった。

私事となって恐縮するが私も平成十一年から高崎市議会議員を務め、市役所では七十三期の白石君や金子君、堀口君らにお世話になっている。その場でわかったことだが、七十三期の卒業生で現在高高で教鞭をとっているものが鳥居（旧姓田淵）君、萩原君、木村君、塚越君と四名もいたことは、県教育委員会の配慮とはいわないまでも当番幹事を迎える私たちに心強いものを与えてくれた。幹事の役割分担や今後のスケジュールなどを決めたあとは、やはり七十三期の平田君が経営している通町の「レノン」へと繰り出して二十八年の空白を一気に埋めんがごとくそれぞれの近況や仕事のことなど、時の経つのも忘れ、そして二十歳のころに戻ったように熱く語り合った。社会的にもさまざまな経験をつんだ年



代の男たちが熱く語り合うさまを見て、当番幹事を四十八歳となった学年が毎年担当するように発案した先輩の先見の明にあらためて感服した次第だった。

前置きが長くなってしまったが、昨年の同窓会報に「来年五十回を迎える翠鸞祭について」という特集が載っていた。そこには「翠鸞祭の質の低下が学内外から指摘されており・・・学芸部の活性化が大きな課題」とある。特集の最後に「活性化に向けた取り組み」として四点が記されており、実行委員会の生徒たちが真剣に取り組んでいる様子が八十五期の松本先生の文章からもうかがえる。今年の翠鸞祭は見学できなかったものの評価は控えるが、二十八年前に地学部が三年間在籍した一人として先の特集は悲しい気持ちで読ませて

特別寄稿

飯塚 俊彦

二十八年目の 雑記帳

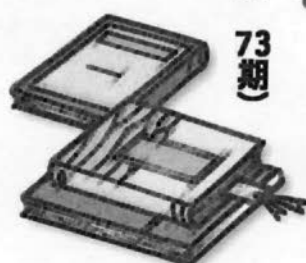
いただいた。運動部との優劣を論じるつもりはないが、調査対象の設定とサンプルの収集・分析と、仮説を設定しての検証など、当時の学芸部活動全体にあった「アカデミック」な雰囲気は高校生にとってはすこぶる刺激的で心地よいものだった。地学部の先輩・後輩のなかから学究の道を選択したものが少なからずいる事実はこのことを物語っているだろうし、学究でなく実社会でも、また私の場合は市議会での活動にもプラスになっていると思う。

もうひとつ学芸部の隠された最大のメリットは何といっても女子校との共同研究に尽きるところ。研究という同じフィールドで交流できるといことは、男子校の部活動にあっては最大の活力の源泉といっても過言ではないだろう。私たちの時には

有孔虫の研究で先輩にあたる高崎市立女子校地学部との共同研究だったが、手順を教わりに高市女に向かう自転車のペダルの何と軽かったことか。当時の地学部はどのような活動を通して、そしてシーラカンスと称された久保先生の指導のかいもあって学生科学賞の受賞常連校となっていた。

他愛もない高校生活の紹介になってしまったが、学芸部で活動する後輩たちへの激励と受け取ってもらえればとの思いで恥ずかしい過去を紹介した次第である。

（高崎市議会議員 73期）



特別寄稿

甲子園の思い出



重田 政樹

同窓会常任理事の関口壮平君から高崎高校時代の思い出を綴って欲しいと電話があった。真つ先に思い浮かんだのが高々の甲子園出場である。高校野球はテレビで見ても実にはすがすがしい。攻守交代はみな一斉に監督の下に集まり、駆け足でダイヤモンドに散ってゆく。同じ野球でありながら試合を見終わったあとの爽快感がプロ野球とは全く違うが、これが多くのファンを感動させる高校野球の大きな魅力になっている。幸運にも、私は高校野球の真髄ともいべき甲子園での感動を、アルプススタンドでの母校応援という形で体験する事ができた。

我等の母校が第五十三回選抜高等学校野球大会の関東代表校として選ばれたのは昭和五十六（一九八一）年一月であった。高高創立以来八十四年目、野球部創部七十五年目の快挙である。県下の予選では正に空前絶後の大進撃といえる勢いで勝ち進み、当時の高高関係者を興奮の渦に巻き込んだ。甲子園での初戦の相手は、甲子園出場の経験豊富な石川県星陵高校である。惜しくも一回戦で敗れはしたが、熱戦の末六回表に、優勝候補と目されていた星陵高校から一点をもぎ取ったときの興奮は、観戦した者の脳裏に深く刻み込まれていると思う。

当時の私はまだ高高入学前で、四月の入学式を心待ちにしている時であったが、このとき外野席で私が覚えた強烈な感動は、到底活字で表すことはできない。三星側を埋め尽くした応援団は心を合わせて声援を送り、そうした大勢の先輩方に囲まれているうちに、いつの間にか早くも翠巒健児に同化して、ふと我に返ると愛校心や郷土愛を通り越した、一種独特な一体感に酔っていた。同じ目的に向けて全員が一致団結する時の、これ程の一体感を、私は今日に至るまで再体験をする機会に恵まれない。甲子園出場という本校野球部の悲願を果たし、我々同窓生にかつてない感動と誇りをもたらしてくれた先輩各位に心から感謝の意を捧げたい。ダイヤモンドで繰り広げたナインの奮闘と共に、応援席で印象の深かったのは、鎧兜に身を固めた中野敏宗・前校長の勇姿であった。当時は高崎市教育長として、最後まで兜の緒をゆるめず教え子達を見守り、その傍らで名物のだるまが片目を見開いて応援していたことも懐かしい思い出である。惜しくも甲子園での一勝は逃したが、ナインの目には涙刺とした充実感があふれていた。高高野球部は甲子園の土を拾わずに帰途についた。「夏にまた来ます」と今日の善戦を心の中に秘め、凛として大舞台を後にした姿は地元紙にも好感を持って報道された。

甲子園での応援を経験できなかった後輩諸君は是非一度、この快挙を心に描いて母校を訪ねて頂きたい。新築された指月庭を眼前にして当時の先輩の偉業に思いをはせるもよし、甲子園で文武両道の理想を実現し得た壮挙の記録誌「長き思い」をひもといて、明日への活力とするもよいであろう。

真つ黒の学生服を着て、最後まで声をからして檄を飛ばし、大きな応援旗を掲げ続けた応援団、ベンチ入りを果たせなかった選手たち、彼らと共に外野席からナインの挙動に一喜一憂した思い出、そして球場にこだました「翠巒」と「セルリアンブルー」の大合唱。この甲子園の光景を思う時、自分の高校生活がありありと浮かび上がり懐かしさで一杯になる。この得難い体験の思い出は、これからも決して色褪せることはないであろう。

（小泉重田小児科 83期）

特集・『指月庭』復興

「バラの香匂ふ」

校歌にも「バラの香匂ふ」と歌われ、高々の一つの象徴として、同窓諸兄の胸に深く刻まれた「指月庭・バラ園」が、本年二月に復興されました。まだ、大輪の花を咲き誇らせてとはいかないまでも、この六月に開催された「翠鸞祭」においては、多くの来場者を迎え、人々の目を楽しませたとともに、

現役生にとっても、新たな憩いの場となっております。

平成九年に創立百周年を迎えた高々は、その記念事業の一環として「翠鸞会館」を建設、その後も、平成十三年には理科棟を新築し、さらに今年度からは二期制を導入、また、文部科学省より「スーパーサイエンスハイスクール」の指定を受けるなど、外観のみならず、その中身においても新世紀に相応しいものへと変革を続けており、その様子につきましては、同窓会報等を通じてお伝えしてきましたとおりです。

その変革の過程の中にあつて、「翠鸞会館」建設と平行して、「バーゴラ・ベンチの老朽化した」「指月庭」の整備も進められ、一面芝生張りの新たな装いのものとなつておりました。校門を入つてすぐの、大櫓を擁する広々とした空間は、新築された翠鸞会館とあいまって、新たな高々の更なる発展を象徴するものでもあつたかと思ひます。

しかしながら、その庭には、匂い立つように咲き誇るバラの姿はなく、校舎南側にその姿を留めるのみとなつておりました。

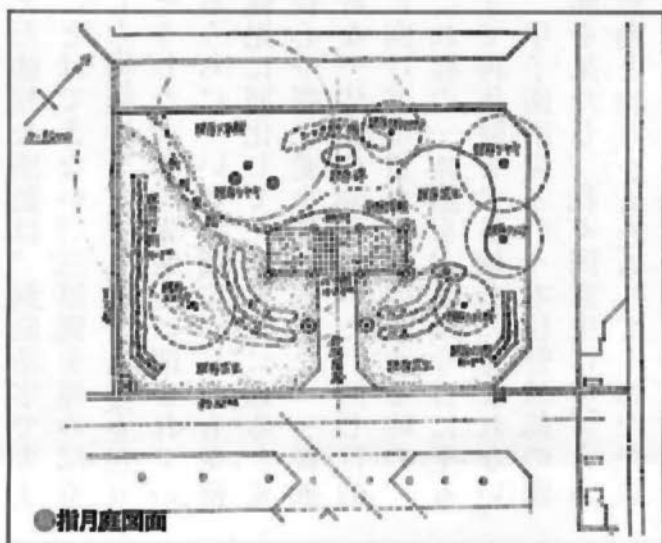
造園以来、約半世紀の長きに亘つて高々生を見守り、育み続けてきた「指月庭・バラ園」の消失を惜しみ、その復興を求める声も多く、同窓会の全面協力の下、造園工事が営まれ、本年二月に完成いたしました。

その姿は、表紙写真として掲載いたしましたとおり、新たにバーゴラが設置され、その下を通り抜ける遊歩道の周りに、色とりどりの花を咲かせるバラが植えられております。

「指月庭」の造営

「指月庭・バラ園」の造園は、昭和二十七年に行われております。

昭和二十五年、新制高校として初の入学式も実施され、戦後の復興の中で、高々も新たな歩みを始めようとした時期にあつて、翌二十六年、校舎焼失という不運な事態に見舞われ、新築された図書館を始め、



●指月庭図面

今はまだ、かつてのような壮観を呈するまでには至っておりませんが、今後、大輪の花を開き、再び多くの高々生にとつての憩いの場となることと思ひます。また、校舎南側に植えられていたバラも、老木となり、花のつきも悪くなったことから、「指月庭」復興に先立ち、平成十一年度、六十八期からの寄付金を元に、新たな苗木を購入しました。今では花壇も整備され、一年生各クラス五名よりなるバラ委員の手入れの甲斐もあつて、大きく成長しております。

北校舎、武道場をこの火災で失うこととなりました。このことは、当時の高々生にとつても、非常に痛ましい出来事であつたと思ひますが、高々は、再び新たな復興のための歩みを始め、この年の十一月には新校舎建設の起工式が行われ、翌二十七年には第一期工事を終了しています。

このような中であつて、昭和二十七年七月、故井上房一郎氏(十五期)の尽力により、元奉安殿と大蔵奉安殿の跡地に「指月庭・バラ園」の造園が始められたのです。その造園に関して、第十六代校長・内藤由己男先生が、「翠鸞」創立六十周年記念特集号」に寄せられた、「高々の名物」と題する文章の中で、次のように語っています。



●故井上氏

当時井上さんは、美術部の指導のために、よく学校へ来ておられたが、私の依頼を快諾されてから約半年も経つた頃、バーゴラが建て始められ、若いバラの苗木がその柱の根元に植えられた。そしてかの鹿嶋が、バラの苗木で埋められて行き、それは更に広げられて、理科室、図書室の前まで延びて行き、今日の緑の美を呈しているのである。書き落としたが、この造営に関する苗木代、人夫賃その他、一さいの費用は、井上さんが自ら負担されたのであり、又、バーゴラの天上の渡し木は、豊田勇さんが倉田の山から切り出して製材して協力されたものである。

庭月指

昭和二十九年五月
指月庭の額
井上氏
庭月指

このように、井上氏が、母校復興の一助として、私財を投じて建造した「指月庭」ですが、その名の由来は、禪僧潮音の随筆「指月夜話」から、武者小路実篤氏が、井上氏の自宅の庭の為に命名されたものを、井上氏が母校の庭園造営に際してこの名を冠したということであり、月の光と青年の理想を関連させたものといわれています。

また、バラを植えた理由については、昭和二十九年五月に行われた「バラ見の会」における新聞部の取材に対して、井上氏自身、次のように語ったということです。

高校の廻りの自然環境とバラは粘土が大好きなの等を考え、又指月庭との調和を考え生きた

(高崎高校新聞第二十三号)

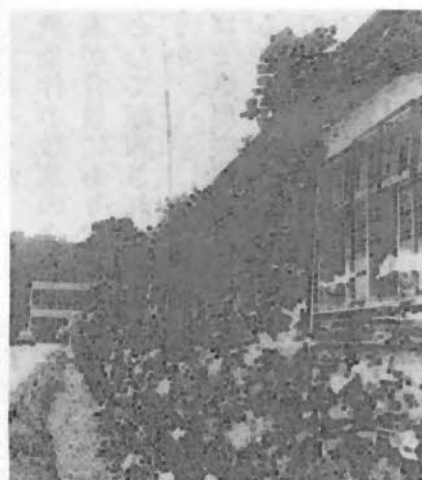
色とりどりのバラの花が咲き乱れるこの美しい庭は、職員生徒の憩いの場となるとともに、以後、多くの高々生の精神的風土としての大きな存在であり続けたのです。

「バラの咲く学園」

この咲き誇るバラについては、昭和二十九年五月三十一日、講演のため高々を訪れた旺文社社長赤尾好夫氏によって、「蜚雪時代」巻頭言(昭和二十九年八月号)で、次のように紹介されています。

バラの咲く学園

地方の高校というものはどこも大体似たようなもので、木造の日本瓦二階造りの素朴な建物が方形に並んで運動場に面した窓ガラスが三つ四つ破れたままになって、窓から青い田圃と街の



●往時のバラ

屋根が見える。手入れのしていない多量な雑草が生け垣や、伝統を誇るように消えかけた門札などを想像される。大体これと大同小異なのが常である。そして手の届きかねている庭の風情などが意外に生徒の無造作の荒けずりとマッチしているものである。

こんな学園を想いながら、過日群馬県のT高校に講演に出かけたが、私は校門を入って驚いた。一面色とりどりのバラの花の満開なのである。校舎にまで、否、校舎がバラの花の中にうずまわっていると言ったほうが妥当かも知れない。美しい様々の模様が、折から雨上がりりの周囲の山や島の緑と調和して、冴えて目がさめるような美しさであった。私は予期に反したこの美しさに呆然としてみとれた。

聞けばこれは、この土地の有名な観音を立てた土地出身の実業家の令息が、画の勉強に仏蘭西に留学して帰られてから、美しい環境から芸術味ある人を輩出させるというような理念を、このバラに託したのだと言う。いよいよ感心させられる話なのである。

さて私は、ここで単にこのバラの美しさを讃えるためにこの文を書いたのではない。私はこのT高校が最近の大学の進学率も極めて良く、またスポーツも盛んで、特にバラの咲く学園とは

想像もできないようなラグビーが盛んであると聞いて我が意を得たりと思つたのである。われわれはしばしば優美と柔弱とを混同したり、素朴と不潔とを間違えたりするが、実際は、美を愛好する精神の中には勤勉とか素朴とか精錬とかいう、人間、特に青年に好ましい様々の要素が含まれているようである。私はこの学園で、この良いサンプルを見ていたく胸を打たれたのである。この記事によって、高々のバラは広く世間に知られるものとなり、昭和三十八年には、東京テレビの朝のニュースで放映されることにもなりました。



●「蜚雪時代」巻頭言

「バラ見の会」

「指月庭」に咲くバラは、高々の大きな財産であると同時に、保護者・地域の



●バラ見の会

方々の多くの目を楽しませてきました。例年、五月のPTA総会当日、「バラ見の会」が開催されておりました。会の様子を、前掲の「高崎高校新聞二三号」では、次のように紹介しています。

例年のバラ見の会は五月二十四日約百名参加して行われた。

(中略)

会は午後二時田中校長、高高プラスバンドの演奏により始められた。このバラ見の会も有名になったもので数名の新聞記者も来ていた。

(中略)

目の縁の赤くなり始めた先生も数名現れ始めた五時頃までに終わり、お母様方は色とりどりのバラを手を手に帰路についた。

井上氏の母校を思い、後輩たちの活躍を願う気持ちのこめられた「指月庭・バラ園」は、造園以来、高々の誇りであり、象徴であり続けました。

「新たな「指月庭」へ」

今、新世紀を迎え、更なる発展を目指す高々に、新たな装いで復興された「指月庭・バラ園」も、高々生の心を潤し続けていくことと思います。

バラの花に見守られ、「指月庭」に込められた、井上氏を始めとする先輩諸兄の様々な思いに励まされ、高々生一人一人が大輪の花を咲かせることでしよう。また、この「指月庭に咲くバラの姿」は、それぞれの胸に深く刻み込まれ、とこしえに高々の象徴であり続けることでしょう。

近くにお越しの際には、是非復興なった「指月庭・バラ園」を眺め、高々の未来に期待を寄せていただきたいと思います。

論

壇

政治の場で思う教育

萩原 康二



小泉総理が誕生した際、米百俵の故事が引用され、大きな話題となった。新たな国家像を作り出すために、「改革」を唱え、国づくりは人づくりに始まることを故事の引用で示し、人材育成の大切さを国民に訴えたものと思う。

私が群馬県議会に議席を得て、早くも二期八年が終ろうとしている。地方議会といえども、軍事や外交を除けば社会の殆どの分野にわたっての問題に直面する。それに対処するためにはそれぞれの分野に関する基本的な知識が当然のように求められる。更に、時間の流れとともに移り変わる社会事象に即応して、直近の情報獲得も必要とされる。

恐らく、政治に携わる者にとっては、世間一般が政治家のイメージとして抱いている以上に、日常的に「勉強」をしなければならぬ状況にあることは確かである。斯く言う私も、議員になる迄の、一民間人としての特定の範囲だけの知識量だけでは及ぶべくもなく、「勉強」を強いられて今日まで来た。

しかし、知識はあくまでも知識であり、本当に必要なのは、それを基礎として「考える作業」であることは言うまでもない。そうした中で、多岐にわたる問題を現実の政治課題として掘り下げて行くとき、

問題の所在と解決の糸口は、人間の資質と能力とに必ず行き着くように思う。政治も経済も福祉も環境も、その他、現在の日本が抱えている諸問題は新たな視点から「人づくり」をしない限り、混迷の度を深めるのではないかと思えてならない。広い意味での教育の立て直しであるが、その中において、説明など必要としない当たり前の常識や徳目が、何時からか、価値観の多様化などというもつともらしい言葉のすり替えによって否定され、場合によっては無用の化石として蔑まれるようになってしまった現実を、もう一度冷静に見つめ直す必要に迫られているように思う。

身近な例で考えれば、青少年の非行や犯罪の増加はまさにそのものである。福祉の充実、といえは聞く耳には快く響くであろうが、一面、親や老いた者への無条件の敬慕の念が希薄となった国民意識が背景にあり、それが社会全体の責任として転嫁されていることはないであろうか。

ゴミ処理の問題にしても、自分が廃棄するゴミと、最終的に始末をされるゴミとの因果関係が、どこまで結びつけられて、住民の自己責任の中で考えられているだろうか。

企業に目を向ければ、狂牛病の騒ぎに便乗し、行政の支援を逆手に取って火事場泥棒のような仕草をした企業やもともと公益的な使命を持った国内有数の企業が、ただただ組織内での防衛のみに思考が走り、本来、最優先されるべき安全がなおざりにされ放置された件等々。その結果は企業の消滅であり、そこまで至らなくとも、信用の失墜や売上げの大幅な減少である。擬装や隠蔽によって得られた僅かな利益に比して、何と大きな代償を払ったことであろうか。

それらに共通して見えて来ることは徳育の欠如と、みずからを省みて考えることの放棄であると思う。

健全な悟性であるとか、生活の中で作り上げられた常識であるとか、それこそ説明を必要としない本来の徳目の価値を素直に認める社会、それを我々は今一度取り戻さなければならぬと思う。

良くも悪くも、現在我々は情報の氾濫する渦中に生きているし、生きる道具としての大量の知識を保有せざるを得ない社会に住んでいる。また、科学技術の進歩は、生活を豊かにし、便利で効率の良い社会基盤を作り上げ、我々はその恩恵に浴している。それは幸福なことであるし、私はその幸福を否定するものではない。しかし我々は、みずから考えることを忘れ、知識や情報に泳がされる存在であってはならない筈である。また、豊かさや効率を求めても、その限界が何処にあるかを見失ってはならないし、「健全」であることの大切さも一方で考えてみる必要があるのではないだろうか。

昨年と記憶しているが、産経新聞の「正

論」の欄に、木村治美氏が執筆した印象的な一文があった。大意だけ記すと次のようなものである。

へかつて洗濯機のない時代、主婦は洗濯板に向かい、多くの家族の衣類を時間と労力をかけて黙々と洗った。現在の主婦は、その仕事を洗濯機が代ってやってくれる。その間、自分の自由な時間が生まれ、肉体労働からも解放された。それは喜ぶべき進歩ではあるが、しかし、昔の主婦にとって、それは無駄な時間であったろうか。恐らくそれは、自分に向き合う、自分と語り合う、考えを深める貴重な時間ではなかったか。現在を生きている人達は、便利さによって生まれた時間をどのように使っているのだろうか」というものである。

戦後教育の陥穽はどこにあったのだろうか。また、核家族化のもたらしたものは何だったのだろうか。

目まぐるしく変り、きちんとした検証と評価のなされない「教育改革」は「人づくり」の本質とは無縁のもののように思えてならない。

走り続けて来た日本人が今、自信を喪失し、目標を見失っているが、良い機会だと思ふ。ゆっくり立ち止まって自分に向き合い、自分の頭で考えてみる必要があるだろう。

時間のかかる作業ではあるだろうが本当に価値ある新しい時代を切り拓くため、日本の再生のためには、「人づくり」について、あらためての国民合意が必要ではないだろうか。

(群馬県議会議員 63期)



同窓会だより

同窓会
だより
1

高朋会(県庁高同窓会)について

高朋会幹事長 松村 薫

高朋会の一年は、毎年二月定例県議会の開会日に開催される「新年総会」で始まります。

「高朋会」の名前の由来「高朋座に満つ(立派な友達が座に満ちている)。」のとおり、総会は現役の職員のほかに、県議会議員の方やOBの先輩方もお集まりになり、群馬会館において盛大に開催されます。議事、懇親会と進み、最後に先輩と後輩が互いに肩を組み、「(現)校歌」と「翠巒」を歌って、総会はお開きとなります。

六月には、「新規採用職員歓迎会」を開催します。

最初に、会長、副会長外幹事と新採職員が自己紹介と高同時代の思い出について話します。ここでは、先輩後輩の意外な一面が披露され、同じ高同の同窓生として、先輩後輩を越えた親近感がわいてくると好評です。

このほか、「ゴルフコンペ」、「先輩後輩交流会」を開催するなど、高朋会の活動は、職場での人間関係、ひいては円滑な公務の遂行に大いに貢献しています。

さて、高朋会の会員数は、平成十四年度現在、議員、OB、関係機関の方々を含めて、五百二十一人にの

ぼります。

長年にわたり、会長には元県教育長の横山巖氏、副会長には元商工労働部長の入澤哲夫氏をお願いしてまいりましたが、昨年度から会長、副会長も現役職員から選出することとなりました。

現在は、林弘二会長(企画部長)、原崎英敏副会長(監査委員事務局長)となっております。

このほか副幹事長、主任幹事、部局幹事の皆さんが一丸となって、総会等の開催、会員名簿の発行(毎年)、会員の慶弔関係その他の会の運営を行っています。

最後になりましたが、群馬県は、「県民が主役の開かれた県政」を目指しています。

県内はもちろんのこと、県外に住まいの高同窓生の皆様で、県政や県庁に関する御意見、群馬県についてお知りになりたいことがある場合は、お気軽に県庁の高同窓生にお声をかけていただければと思います。

末筆ではございますが、校長先生始め教職員、生徒の皆様の御活躍と母校高同の益々の御発展を御祈念申し上げます。

(群馬県土木部都市計画課 75期)

同窓会
だより
2



区切りの集い(51期同期会)

持田 章

旧制中学最後の入学、そして、五十一期として母校を卒業した私たちは、大方のメンバーが六年間の同級生生活をおくった。最終の学年はおよそ二百七十名が十クラスに分かれ、火災直後の焼け残り校舎に分散して学習した。講堂を間仕切った教室では、隣の部屋の声が筒抜けだった。

入学の頃はべらべらの折り畳み教科書が使われていたことなどを合わせ考えると、教育環境は決してよくなかった。しかし、皆、頑張った。先生方の熱心な指導もあって、私たちは苦しい中でも、自らの希望進路実現のため、勉学に運動にと精を出した。

そんな思い出をもつ五十一期の面々は、今年、卒業五十周年を迎えた。その記念を含めての同期会が、去る五月にターミナルホテルで開催された。北は北海道旭川、南は九州宮崎などからの参加者を得て、九十余名の集まりとなった。同期会初参加という顔もあり、集会は、和やかなうちにも、活発なものになった。

振り返ってみると、五十一期会は卒業の翌年から、同期会としての集会をもっている。爾来、二、三年に一度の割合で開かれ、その都度かなりの数の参加者があった。幹事連中

の努力の結果ではあるが、六年間同じ窓を見ながら過ごし、知らない顔がないという同級生意識がその基になっている筈である。

故田中順君(元高同窓会副会長)を先頭にした幹事会も整備され、毎年一冊、同期会「会報」が発行されるようになり、会の運営、同期生相互の連絡、母校の動向、会員の意見等々が各人に伝わるような方策もとられた。さらに、私たちが還暦を迎えた時には、還暦記念誌「秀嶺樓名紫に」が発行された。この作成に当たっては、会報や同期会総会での啓蒙が何度となくなされたとはいえ、諸先輩の例を遙かに上回る数の原稿が寄せられ、名実共によい記念誌となった。

本来、私たちの同期会は、できるだけ多くの参加者を、という目的で、その度ごとの総会を開いてきた。が、ここに至り、多少の疲労が見え始めている。幹事会の提案により、そういう形の総会は、今回限りにしようということになった。区切りの時期だと大方が解釈した。これからは、有志の形で、自由な発想でやり、今後五十一期の結束を続けようという結論になった。



◇会員名簿刊行される

「会員名簿」が本年六月に刊行されました。この刊行に際しましては、会員の皆様に住所変更、同期生の消息、広告掲載等、さまざまな面でご指導、ご協力をいただき、本当に有難うございました。今回の刊行においては、年々増加する会員数に応じて増加する紙数が名簿を大部なものにしてしまい、価格も押し上げてしまったため、昭和廿年までの卒業期については各期毎に逝去者欄を設けてご逝去された会員をまとめて掲載することで、紙数のいたずらな増加を抑えて適正な厚さを守り、価格も据え置くことができました。

また、前回の会員名簿では索引がわかりにくいとのこと指摘がありましたので、完全五十首順にすることで改善を図りました。前回よりも格段と使いやすくなりました。

名簿作成には、細心の注意をはらい正確を期しましたが、会員が二万数千名おり誤記を全くなくすのは至難の業です。誤記にお気付きの場合は、同窓会事務局までお知らせ下さい。正誤表に載せるか、正誤表発送後の場合でも原票を訂正し、次回発行に役立てたいと思います。

「会員名簿」は原則として予約販売で既に予約者へ発送済みですが、残部が少々ありますので、ご入用の方は同窓会事務局へお越し下さい。ただし、購入の際には本人を証明するものの提示を求めますので、ご承知の上ご用意下さい。今回の「会員名簿」の刊行は平成十九年です。それまでは本同窓会による「会員名簿」の刊行はありませんので、類似の名簿発行事業の勧誘に十分ご注意下さい。

◇五十期有志校歌・応援歌額、五十四期半田氏彫刻を母校へ

昭和二十六（一九五二）年卒業した第五十期生は昨年卒業五十年を迎えました。この節目に母校へ記念品を贈ろうという機運が醸成され、本年二月学校の要望に応じて、体育館のステージ脇壁面に校歌と応援歌の歌詞のレリーフを贈りました。体育館での式典・集会には必ず校歌・応援歌を斉唱する生徒諸君には、「大変便利だ」と、好評です。

また、昭和三十（一九五五）年卒業の第五十四期生も、卒業五十年記念事業を前倒しして、同期の彫刻家半田富久氏の作品に台座をつけ一体として母校に贈ることにしました。これは学校・造園設計者と相談して、新装なった指月庭の一角に設置が決まり、十一月末完成を目途に工事が進んでおります。

◇田中副会長が急逝

田中順副会長が三月十一日病気のため急逝されました。田中氏は第五十一期の卒業生で、平成三年より副会長として本同窓会の運営にご尽力され、特に母校創立百周年記念事業においては、総務委員長として「高崎高校百年史」刊行の推進役となり、同書の上毛出版文化賞特別賞受賞に大きな貢献をされました。また、「財団法人翠樹育英会」の創設にあたってもご尽力され、初代常務理事として育英会の発展の基礎を築き、その後副理事長として厳しい金融情勢下の育英会運営にご腐心されておりました。ご冥福をお祈りいたします。

◇指月庭を復興

昨年より計画されていた指月庭の復興事業は、本年二月新たな装いで復興しました。本事業は演名造園設計研究室の演名光彦氏（五五期）の設計・監理で進められ、旧指月庭の面影を生かしながら、バーコラをステンレス製にするなど新しい感覚でリニューアルされました。来年は花もにぎやかに咲くと思いますのでご期待下さい。

◇翠樹セミナーについて

本年度の翠樹セミナーは左記のとおり翠樹会館にて催され好評でした。

第一回 七月六日（土）

「血管を守る」 群馬大学医学部第二内科教授

倉林 正彦氏（七三期）

第二回 十月十九日（土）

「話して伝えることば」 NHK放送文化研究所放送用語担当部長

小坂橋 靖夫氏（六九期）

卒業生の作品紹介18



イラストレーター
峰岸 達
(64期)



『私の昭和町』

イラストレーションの仕事始めて、かれこれ三十数年も経った。現在は単行本や雑誌の表紙、小説の挿絵、広告のポスターなど、色々手掛けている。作風としては、三十代の中頃からノスタルジー傾向の強い絵（少年期を過ごした昭和二十～三十年代の風物や人物などがモチーフとなっている）を描くようになった。

今年の八月にPHP研究所から「私の昭和町」と題した画文集が出た。昭和町というのは、ぼくが生まれ育った高崎市昭和町の事だ。そこで会ったり見たりした人物や風物をモチーフとし、各ページごとに短い文章を添えた。ちょっと変わった人、ちょっと面白い人が色々登場する。赤い郵便ポスト、タバコ屋の珈琲看板、床屋のサイン・ポールなど懐かしい風景も描かれている。

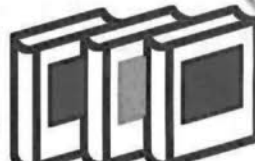
- 藍綬褒章(児童福祉功労)
58期 千葉照典(62歳)
…東光保育園長・薬王寺住職
- 勳一等瑞宝章(会計検査功労)
46期 中村 清(72歳)
…前田建設(株)名誉会長
- 勳四等瑞宝章(畜産業振興功労)
39期 只木栄一(79歳)
…元全国酪農協同組合連合会理事
- 勳五等瑞宝章(児童福祉功労)
57期 岸 吉人(62歳)
…元肢体不自由児施設「群馬整肢療護園」指導課長
- 藍綬褒章(地方自治功労)
定16期 浅貝正雄(60歳)
…高崎市議会議員
- 藍綬褒章(産業振興功労)
56期 児玉二郎(64歳)
…日本鍛冶機械工業会副会長
- 勳三等瑞宝章(農林水産行政事務功労)
50期 中島英男(70歳)
…元家畜衛生試験場長
- 勳四等旭日小綬章(地方自治功労)
45期 吉田康一郎(73歳)
…元県農政部長
- 勳五等双光旭日章(教育功労)
46期 吉井 基(72歳)
…元公立盲学校長
- 勳五等瑞宝章(社会福祉功労)
41期 喜美候部圭吾(78歳)
…知的障害者授産施設「清涼園」施設長
- 勳五等瑞宝章(地方自治功労)
45期 真下和二(74歳)
…元県地方労働委員会事務局長

(注) もし漏れがありましたら、恐縮ですがご連絡ください。

平成十四年度褒章・叙勲受章者 (敬称略)

翠

戀文庫
BOOK



●著書

●作者

- | | |
|-------------------------------|------------|
| □分部順治作品集 | 分部 順治(27期) |
| □無用の用 | 須藤 宣(49期) |
| □A Guide to Practical English | // |
| □ラビリンス 76の詩 | 三好 研一(42期) |
| □句集 暗黙 | 前田 幹夫(41期) |
| □長野原町の自然 | 斉藤 晋(56期) |
| □生態学への招待 | // |
| □詩集 雪原のキツネ | // |
| □超光速粒子 タキオン(ブルーボックス) | 本間 三郎(53期) |
| □躍進するフラッシュメモリ | 舩岡富士雄(61期) |
| □道元、日々の生きかた | 佐藤 達全(65期) |
| □「いのち」をみつめるー仏教と食と保育ー | // |
| □CMタレント「好感度」のひみつ | 関根 建男(57期) |
| □天にまかせる | 石井敬之助(50期) |
| □残日録 | 高中四十二回同窓会 |

各部の活躍・活動

山岳部

水泳部の練習では基礎体力を養う他いろいろな運動を取り入れ自分を鍛えています。また、部活動以外にも私は個人的にスイミングスクールに週六回通っていて、ハードなトレーニングを積んでいます。夏の県大会では総合五位、リレーで関東大会へ出場することもできました。

今回の結果は一つの通過点にしからず、これからもつと上を目指していきたいと思います。また、こうした結果、過程は様々な方々の御支援御声援のおかげでもあります。そういったことに常に感謝の心を持ち練習に励みたいと思います。本当にありがとうございました。

贊田 高弘



員が三人という少ない人数ではありますが、観音山を走ったり、トレーニング室で筋トレーニングをしたり、また登山に関する知識を身につけたりと毎日活動をしています。そ

我々山岳部にとつて今年は大きな飛躍の年でした。春の県総体では五位に入賞し、関東大会（神奈川県箱根）に出場することができました。また、夏山合宿では北アルプス北穂高岳、前穂高岳の難ルート縦走を実現しました。

僕自身も、国体の群馬県代表として高知国体に出場し、群馬県チームは総合七位の成績を収めることができました。全国の強豪が集うこの大会において学んだことは多くありましたが、その中でも特にクライミング技術の向上が必要であると強く感じました。今年の国体から少年の部に初めて導入されたクライミング競技は、地域によって大きく差が出たように思います。これからは登山と同様にクライミングの練習も取り入れていきたいと思っています。

運動部

- ①県総合体育大会
- ②関東大会
- ③インターハイ予選
- ④全国高校総体
- ⑤国体
- ⑥県新人大会
- ⑦その他の大会

空手道部

- ①堀口林太郎 個人形 決勝進出
③木暮亮介 個人形 決勝進出
⑤木暮亮介 個人形 決勝進出
個人組手 4回戦(ベスト16)
⑦新人大会(空手道連盟主催)
木暮亮介 個人形 決勝進出
県一・二年生大会
木暮亮介 個人形 決勝進出

剣道部

- ⑦県選手権大会
- | | | |
|---|-----|-----------|
| ① | 1回戦 | 高崎5-0太田工 |
| 2 | 回戦 | 高崎3-2常磐 |
| 3 | 回戦 | 高崎4-1利根実 |
| 4 | 回戦 | 高崎2-13農大二 |
| ③ | 2回戦 | 高崎4-1健大高崎 |
| 3 | 回戦 | 高崎3-2伊勢崎東 |
| 4 | 回戦 | 高崎2-2前橋商 |
- (本数負け) ベスト8

弓道部

- 2回戦 高崎4-1太田
3回戦 高崎3-2伊勢崎東
4回戦 高崎1-3高崎工ベスト8

硬式野球部

- ①団体戦 7位
③団体戦 優勝 インターハイ出場
個人戦 小林悠波 2位 インターハイ出場
④団体戦 予選通過
決勝トーナメント1回戦
個人戦 小林悠波 予選通過 準決勝
⑦関東個人選手権県予選 堀内岳洋 6位
関東個人選手権 堀内岳洋 5位
西毛地区大会 団体戦 3位

サッカー部

- 春季関東大会群馬県予選
2回戦 高崎9-2松井田
3回戦 高崎1-2太田東
全国高校野球選手権大会群馬県予選
2回戦 高崎7-0中之条
3回戦 高崎1-2前橋
秋季関東大会群馬県予選
2回戦 高崎1-8前橋

- ①4回戦 高崎4―0伊勢崎商
準々決勝 高崎1―1高経附
(PK3―5) ベスト8
③4回戦 高崎3―0太田
準々決勝 高崎0―2高経附 ベスト8
⑥平成15年1、2月開催
⑦県高校サッカー1年生大会
1回戦 高崎1―1高崎工(PK3―1)
2回戦 高崎3―0渋川
3回戦 高崎1―0中央
準々決勝 高崎1―0沼田
準決勝 高崎2―2館林(PK5―3)
決勝 高崎1―2高経附
全国高校サッカー選手権県大会

バレーボール部

- ①3回戦 高崎2-0 洪川
準々決勝 高崎2-0 前橋西
準決勝 高崎0-2 伊勢崎東 3位
②1回戦 高崎2-0 日野台(東京)
2回戦 高崎0-2 東海大浦安(千葉)
③4回戦 高崎2-0 館林
準々決勝 高崎2-0 高崎工
準決勝 高崎1-2 桐生商 3位
⑦西毛地区大会
2回戦 高崎2-0 富岡実
準決勝 高崎2-0 中央
決勝 高崎2-1 高崎北 優勝

ラグビー部

- ①2回戦 高崎40-24 樹徳
準々決勝 高崎33-19 明和県央
準決勝 高崎0-58 農大二
シード決定戦 高崎6-5 前橋 3位
③準々決勝 高崎16-22 樹徳 5位
⑥平成15年1、2月開催

陸上部

- ①八百m 中山拓紀 2位
千五百m 中山拓紀2位/関 敏則 4位
五千m 関 敏則 2位
百十mH 樋口智幸 5位
五千mW 山口裕毅 4位
棒高跳 高田裕弥 5位
やり投 片山裕之 4位/高田裕弥 6位
総合 6位
②八百m 中山拓紀 4位
千五百m 中山拓紀5位/関 敏則 8位
百十mH 樋口智幸 8位
④八百m 中山拓紀 6位

- 千五百m 中山拓紀 5位
⑤走幅跳 谷岡一誠 出場
⑥八百m 小杉 健 7位
千五百m 関 敏則 1位/小杉 健 8位
五千m 関 敏則 1位/飯塚淳司 5位
三千mSC 飯塚淳司 1位
五千mW 長崎 樹 1位/山口裕毅 2位
棒高跳 高田裕弥 5位
走幅跳 谷岡一誠 2位
三段跳 福田雄介 7位
円盤投 片山裕之 1位
やり投 片山裕之 2位/高田裕弥 6位

⑦関東選手権

- 八百m 中山拓紀 5位
千五百m 中山拓紀 5位
五千m 関 敏則 7位
学校対抗
八百m 中山拓紀 1位/瀧川聡史 7位
千五百m 中山拓紀 1位/関 敏則 4位
五千m 関 敏則 2位/高橋優一 6位
百十mH 樋口智幸 2位
四百mH 宮近慎太郎 7位/神戸悠希 8位
三千mSC 飯塚淳司 5位/新井正典 6位
五千mW 山口裕毅 3位/長崎 樹 5位
棒高跳 高田裕弥 8位
走幅跳 谷岡一誠 1位
三段跳 福田雄介 7位
砲丸投 片山裕之 5位
円盤投 片山裕之 4位
ハンマー投 千頭和幸弘 7位
やり投 片山裕之 1位/高田裕弥 3位
四×四百mR 7位(住谷宮近・神戸・中山)

総合 2位

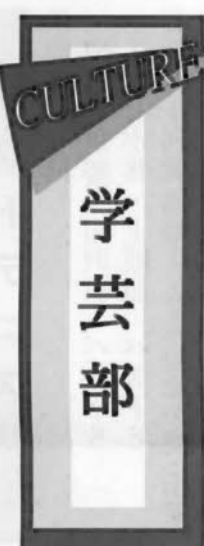
- 関東高校新人
千五百m 関 敏則 3位
五千m 関 敏則 2位

- 三千mSC 飯塚淳司 2位
五千mW 長崎 樹 3位
円盤投 片山裕之 5位
やり投 片山裕之 2位
県高校駅伝

- 1区 関 敏則 1位/2区 小杉 健 2位
3区 高橋優一 3位/4区 飯塚淳司 4位
5区 瀧川聡史 3位/6区 新井正典 3位
7区 中山拓紀 3位 総合 2位

バドミントン部

- ①団体 1回戦 高崎0-2 桐生商
個人シングルス 3回戦
中嶋、金井、清水隆、狩野、土屋、
個人ダブルス 3回戦
金井・庭田組、清水裕・中嶋組
永井・狩野組
③団体 1回戦 高崎3-0 富岡実
2回戦 高崎3-0 太田工
3回戦 高崎0-3 太田商ベスト8
⑥1年シングルス 高橋 4回戦
落合、三世川 3回戦
シングルス 狩野 3回戦
ダブルス 狩野・清水組 4回戦
永井・山口組 4回戦
団体 2回戦 高崎3-2 伊勢崎商
3回戦 高崎0-3 太田



将棋・囲碁部

- 【将棋】群馬県高等学校将棋選手権
団体 準優勝(伊藤・門田・栗本)

- 個人 原 知明 準優勝
全国高等学校将棋竜王戦群馬大会
個人 伊藤 進 3位
関東高文連将棋大会群馬県予選
個人 Aクラス 栗本智也・竹村和幸
ベスト8
個人 Bクラス 田中宏幸・牛尾 昂
ベスト8

【囲碁】全国高校囲碁選手権大会

- 団体 準優勝(田中・中野・黒沢)
個人 堀米 顕久 優勝
全国高校総合文化祭
個人戦出場
関東高校囲碁選手権大会県予選
団体 優勝(中野 田中 佐藤)
個人 堀米顕久 優勝
関東高校囲碁選手権大会
団体 6位
個人 堀米顕久 8位

吹奏楽部

- 県ソロコンテスト
金賞：野辺亮太(フルート)
○県吹奏楽コンクール 銅賞

鉄道研究部

- 十月五日(土)・六日
高崎間屋町グランドバザールに
鉄道ジオラマを出展
○十月二十七日(日)
群馬公共交通フェアに鉄道ジオラマを出展

新聞部

- 群馬県高校新聞コンクール
(上毛新聞主催・県教育委員会協賛)
県知事賞受賞

第56回定期戦

ジnkスを破る。この目標を掲げ、今年度の定期戦実行委員会は発足した。ここ数年、ホームチームが勝利するというジnkスを、なんとしても覆したいという思いがあった。

本戦までに行われた競技においては、各部・生徒の奮闘もあり、27―6と前高を圧倒することができた。また、一般生徒の練習参加率は例年以上であり、目標達成の期待を胸に、前高を訪れた。

しかし、前高の予想外の反撃にあい、ここ二年間勝ち越していた一般対抗において負け越してしまった。最終得点差は10点であり、我々の完敗である。

定期戦当日まで、多くの高々生が熱心に練習に参加し、努力してきたことを思うと、悔しさのため涙を堪えることができなかった。

今年、ジnkスを破るということは達成できなかったが、この思いを後輩たちが受け継ぎ、必ずや達成してくれることと思う。

この伝統ある定期戦の実行委員長として、運営に携わり、多くの高々生と一つの時間を共有できたことは身に余る光栄であったと感じている。

定期戦の更なる発展を祈って。

(第56回定期戦実行委員長 塚本 大祐)

進路状況 (全日制) ()内は現役

大学	年次	12年	13年	14年	大学	年次	12年	13年	14年
北大		6(4)	8(4)	6(5)	慶應大		75(55)	55(46)	64(42)
東北大		21(18)	19(15)	21(18)	早稲田大		67(49)	64(49)	66(39)
筑波大		7(6)	8(7)	3(2)	中央大		53(44)	52(41)	60(51)
千葉大		6(6)	5(3)	3(3)	明治大		55(39)	63(46)	53(43)
群馬大		24(20)	28(25)	15(13)	上智大		5(2)	7(5)	6(3)
(医)		8(6)	9(6)	6(4)	立教大		10(9)	19(16)	19(10)
埼玉大		2(2)	3(2)	8(8)	学習院大		6(2)	11(8)	7(4)
東京大		15(13)	17(16)	15(12)	青山学院大		28(20)	13(10)	13(13)
一橋大		7(6)	2(2)	6(2)	法政大		38(28)	35(28)	33(27)
東工大		11(9)	3(3)	11(4)	日本大		49(34)	37(30)	51(46)
横国大		8(6)	8(6)	5(5)	東京理科大		78(64)	91(70)	85(65)
新潟大		11(9)	13(11)	13(13)	芝浦工業大		20(15)	28(24)	22(21)
金沢大		3(3)	7(7)	7(6)	同志社大		9(5)	4(1)	2(2)
信州大		4(4)	1(1)	2(1)	立命館大		23(19)	28(25)	22(21)
名古屋大		4(1)	4(4)	1(0)					
京都大		3(2)	3(3)	4(2)	高経大		11(8)	5(5)	8(6)

第56回定期戦得点表

部対抗		種目	一般対抗	
高高	前高		高高	前高
		水泳	9	0
		駅伝	6	3
		綱引き	6	3
		五入れ	3	6
		ソフトボール	0	9
0	6	卓球	5	4
0	6	陸上競技	3	6
6	0	ソフトテニス	0	9
6	0	バレーボール	4	5
6	0	バスケットボール	4	5
6	0	柔道		
0	6	剣道		
0	6	弓道		
0	6	空手道		
6	0	サッカー		
0	6	ラグビー		
0	6	硬式野球		
6	0	軟式野球		
6	0	硬式テニス		
42	42	小計	40	50
92	前高	総合	高高	82

人事異動 (平成14年度)

退職者

【全日制】
教頭 福田 賢吾

転任者

【全日制】
教頭 大崎 博章 安中高校から
英語 森泉 孝行 伊勢崎東高校から
日本史 茂原 賢三 沼田高校から
物理 茂木 豊 沼田高校から
事務職員 多胡 和明 二葉養護学校から
特任助手 吉田 晴幸 高崎工業高校から

【通信制】

教頭 武井 敏男 高崎女子高校から
国語 荒木 俊秀 高経大附属高校から
保健体育 真藤 克裕 地公臨
事務職員 富岡 明美 板倉高校から

【全日制】

物理 品川 和男 伊勢崎東高校へ
日本史 樽見 尚人 吉井高校へ
英語 女屋 浩 渋川高校へ
事務職員 横川 浩之 市立伊勢崎養護学校へ
特任助手 森 正美 高崎工業高校へ

【通信制】

教頭 塩崎 猛雄 桐生南高校教頭へ
国語 半田 勇 安中高校へ
保健体育 神田 直俊 高崎北高校へ
事務職員 清水由佳里 境高校へ

高高同窓会 予算決算報告

平成13年度 通常会計 (平成13年1月1日～平成13年12月31日)				
収入の部				
費 目	平成13年度予算	平成13年度実収入	備 考	
前年度からの繰越金	629,281	629,281		
入 会 金	2,920,000	3,002,000	360人	
維持会費	6,000,000	5,806,420	2,055人	
利 息	1,719	2,042		
雑 収 入	10,000	3,458,670	100年史代金・ネクタイピン代等	
合 計	9,561,000	12,898,413		

支出の部				
費 目	平成13年度予算	平成13年度実支出	備 考	
会 議 費	1,000,000	805,753	平成14年度総会補助30万円他	
祝 賀 費	800,000	689,411	ネクタイピン・卒業証書九段・祝賀者記念品代等	
随 別 費	300,000	110,000	平成13年転退職員へ	
慶 弔 費	200,000	110,835	葬儀花輪代等	
通信印刷費	500,000	343,193	維持会費納入礼状・葉書代・郵送料等	
旅 費	100,000	90,000	京浜同窓会出席者等	
会報発送費	2,000,000	1,687,613		
同窓会報費	1,000,000	690,516		
事 務 費	1,800,000	1,342,025	人件費・事務用品代等	
同窓会長賞費	200,000	86,173	文館代	
補 助 費	600,000	600,000	国書館・翠雲体育会へ各30万円	
雑 費	300,000	243,725	維持会費振込手数料・広告代等	
予 備 費	761,000	0		
合 計	9,561,000	6,799,244		

差引残高 6,099,169円

特別会計積立				
収入の部				
前年度からの繰越金	3,005,290			
平成12年度通常会計より	1,500,000			
利 息				
合 計	4,505,290			
支出の部				
な し				
差引残高	4,505,290円			

平成14年度 同窓会通常会計予算 (平成14年1月1日～平成14年12月31日)				
収入の部				
費 目	平成14年度予算案	前年度予算	増 △減	備 考
前年度からの繰越金	2,399,169	629,281	1,769,888	
入 会 金	3,000,000	2,920,000	80,000	
維持会費	6,000,000	6,000,000	0	
利 息	1,831	1,719	112	
雑 収 入	10,000	10,000	0	
合 計	11,411,000	9,561,000	1,850,000	

支出の部				
費 目	平成14年度予算	前年度予算	増 △減	備 考
会 議 費	1,000,000	1,000,000	0	新年総会準備金他
祝 賀 費	800,000	800,000	0	
随 別 費	300,000	300,000	0	
慶 弔 費	200,000	200,000	0	
通信印刷費	500,000	500,000	0	
旅 費	100,000	100,000	0	
会報発送費	2,000,000	2,000,000	0	
同窓会報費	1,000,000	1,000,000	0	
事 務 費	1,800,000	1,800,000	0	
同窓会長賞費	200,000	200,000	0	
補 助 費	600,000	600,000	0	翠雲体育会・国書館
雑 費	300,000	300,000	0	
予 備 費	2,611,000	761,000	1,850,000	事務用パソコン更新 前月経費
合 計	11,411,000	9,561,000	1,850,000	

特別会計積立				
収入の部				
費 目	金 額			
前年度からの繰越金	4,505,290			
平成13年度通常会計より	3,700,000			
利 息	19,000			
合 計	8,224,290			
支出の部				
な し				

第9回 高崎高校同窓会ゴルフ大会結果報告

6月9日(日)に、プレスCCで横田同窓会長をはじめ、大勢のOBの方(121名、84組)に参加して頂き、早朝(7時12分 ティ・オフ)より熱気あふれるプレーが見られ、また和気藹々と楽しい一日となりました。成績を見ますと、さすがにゴルフの上手い学年と自他ともに認める68期の活躍が目立ちます。ちなみに当番の65期は、ベビーブームの申し子だとか、団塊の世代とか、周りからハッパをかけられて55年間良い子ぶりっ子で生きてきた、いわゆる大鵬、巨人、卵焼きの大好き世代で、司馬史観に洗脳された権力に従順な世代です。そんな学年が精一杯幹事を努めました。

(井草秀樹 65期)

順 位	氏 名	OUT	IN	GROSS	HDCP	NET
優勝	小林 良明 (68期)	42	41	83	15.8	67.4
準優勝	松山 仁 (68期)	41	44	85	15.8	69.4
第3位	宮森 啓之 (68期)	40	46	86	15.8	70.4
第4位	細野 幹夫 (68期)	44	42	86	15.8	70.4
第5位	武田 松夫 (63期)	41	44	85	14.4	70.8

〇維持会費の納入について

平成15年度の維持会費の納入をお願い致します。納入については、同封の振込取扱票(加入者名一群馬県立高崎高等学校同窓会)をお使いください。詳細については振込取扱票の裏面に記載してありますので、よく御覧ください。

■編集後記

同窓の皆様の多大なる御協力をいただき、会報38号が発刊できました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。御多忙の中、貴重な原稿やお写真をお寄せ下さいまして、まことにありがとうございました。(本部幹事会)

第101回高高同窓会新年総会のご案内

同窓生の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。今回の新年総会は、私達72期が担当させていただくこととなりました。101回目ということで、同窓会の原点に戻り、旧交を温めていただくべく、諸先輩のご指導、ご助言を仰ぎながら準備を進めております。

懇親会におきましても、一工夫をこらしておりますので、ご

期日 平成十五年一月二十五日(土)
時間 午後三時より
場所 高崎ビューホテル
会費 五千元
(当番期72期代表 糸井丈之)